

家礼その3～昏礼

第1章 議昏＝結婚を話し合う

男子は、16歳から30歳までとなります。女子は、4歳から20歳までとなります。[司馬公は、こう言っています。「昔は、男は30歳で娶り、女は20歳で嫁ぎました。今の規定では、男は15歳以上、女は13歳以上で、いずれも縁組に従っています。今、ここの説をつくったのは、昔と今のやり方を統合するため、礼の規則のほどよいところをくみとるため、天地の道理に従うため、人情として適正なところに合うようにするためです」。自身が主昏（婚礼をとりしきる人）の適格者となった人は、期（一年の喪）以上の喪に服する必要がないなら、結婚をとりおこなえます。[大功（九か月の喪に服するときの服）を着る期間中で、まだ葬り終わってないときも、結婚をとりしきってはいけません。およそ主昏（婚礼をとりしきる人）は、冠礼のときに主人が行う作法と同じようにします。ただ宗子（一族の代表）がみずから結婚するときには、族人（一族の人間）の年長者を主人とします]。必ず先ず（男性側が）媒氏（媒酌人）を往来させ、話を通じさせて、女氏（女性の実家）が許可するのをまち、それから納采（結婚の申し入れ）をします。[司馬公は、こう言っています。「およそ婚姻を話し合うときは、その婿と嫁の性行、それとそれぞれの家法がどのようになっているかを先ず調べるべきです。万が一にも相手の富貴を慕うようなことがあってはいけません。婿がもし賢ければ、今は貧賤であっても、いつかは富貴になるかもしれません。もし不肖であれば、今は富貴であっても、いつかは貧賤になるかもしれません。嫁は一家の盛衰にとって重要な役割をするものです。もし嫁の実家の一時的な富貴を慕って嫁を娶るなら、あちらはその富貴をたのみにし、「その夫を軽んじなくても、その舅姑（夫の父母）に対して大きな態度をとる」なんてことは少ないものです（必ず夫も軽んじられます）。結果、驕慢な性格と妬みやすい性格を養成し、いずれ悩みの種となり、どうして大きなトラブルに発展しないことがあるのでしょうか。妻の実家の財産をバックにして財産を多くしたり、妻の実家の勢力をバックにして地位を高くしたりすることは、いやしくもりっぱな男子としての意気ごみのある人なら、恥としないことができるでしょうか。さらに世俗で、小さい子どものときに軽々しく婚約させること、または子どもが生まれる前から婚約させることを好む人は、その子が大きくなったとき、できの悪い無頼漢になったり、ひどい病気を持つ人になったり、家が貧しくて衣食に困るようになったり、服喪の期間が互いに重なったり、遠方で官職についたりして、とうとう信義を捨てて約束を破ることになり、すぐに訴えて裁判で言い合うことになる人がとても多くいます。そういうわけで先祖の太尉は「わが家の男女は、必ず成長するのをまってから、

それから結婚を話し合う」と言ったのです。すでに書面で結婚の申し合わせをしたなら、数か月もしないうちに必ず結婚をとりおこないます。ですから、死ぬまで後悔することがないのであり、そこで子孫は手本とすべきなのです]。

第2章 納采＝結婚の申し入れ

[その采擇の礼を納れます（すなわち結納を行います）。これは今の世俗で言うところの「言定」です]。

主人は手紙をととのえます。[主人は、主昏（婚礼をとりしきる人）です。手紙には賤紙（手紙用の小さな紙）を使い、世俗で行われている礼のようにします。もし族人（一族の人間）の子であるときには、その手紙をととのえて宗子（一族の代表）に告げます]。朝早くに起き、手紙を両手でささげもち、そうして祠堂に告げます。[成人式をとりおこなうことを告げる作法のようにします。その祝版（祝詞をはりつける板）は前と同じです。ただし「某之子某、若某之某親之子某、年已長成、未有伉儷、已議娶某官某郡姓名之女、今日納采、不勝感愴、謹以」と言います。後は同じです。もし宗子がみずから結婚するときには、みずから告げます]。そこで子弟を使者として、女氏（女性の実家）のようにさせます。女氏（女性の実家）の主人は、出てきて使者に会います。[使者は、女氏（女性の実家）のようにきれいに着飾ります。女氏（女性の実家）も、宗子（一族の代表）が主人となり、きれいに着飾って出て使者に会います。宗子（一族の代表）の娘でないときには、その父は主人の右に位置し、父が年長であるときにはやや進み、年少であるときにはやや退きます。お茶を飲み終わったら、使者は起き上がり、言葉を出して、「吾子有惠、祝室某也、某之某親某官、有先人之礼、使某請納采」と言います。従者は手紙を前に出し、使者は手紙を主人に渡します。主人は、答えて「某之子若姉、姪、孫、蠢愚又弗能教。吾子命之、某不敢辞」と言い、北に向いて二度おじぎします。使者は避けて、それに答えるためにおじぎすることがないようにします。使者は退くことを請い、許可をもらってから出て、次（とばりを張ってつくった控所）まで行きます。もし子の結婚を約束する人が主人の姉（父の姉）となるときには、「蠢愚又弗能教」を言いません。その他の言葉は、いずれも同じです]。終わったら、（女氏（女性の実家）の主人は）手紙を両手でささげもち、そうして祠堂に告げます。[婿の家での作法と同じようにします。祝版（祝詞をはりつける板）は前と同じです。ただし「某之第幾女、若某親某之第幾女、年漸長成、許嫁某官某郡姓名之子若某親某、今日納采不勝感愴、謹以」と言います。後は同じです]。出て、返事の手紙を使者に渡し、終わったら、お礼します。[主人は出て、使者を案内して堂（表座敷）に登り、返事の手紙を渡します。使者は、これを受け取ったら、退くことを請います。主人は、お客としてお礼することを請い、そこ

で酒食を用意して使者にお礼します。使者は、ここで初めて主人と挨拶をかわしますが、それはふだんお客をもてなすときの礼のようにします。従者も、別室（別の部屋）でお礼します。使者と従者には、いずれもお礼として金品を渡します。使者は、婿氏（婿の実家）に戻り、報告します。主人は、再び祠堂に告げます。[祝（祝詞）を使いません]。

第3章 納幣＝結納品として金品を納める

[むかしの礼には、問名、納吉がありました。今はすべて使うことができません。納采、納幣を使うにとどめ、そうして簡便になるようにします]。

幣（贈り物）を納めます。[幣（贈り物）は、色繪（色のついた絹）を使います。貧富に応じて適切なものをになるようにします。少なくとも2を下回らないようにし、多くても10を上回らないようにします。今の人は代わりに釵釧（かんざしと腕輪）、羊酒（肉と酒）、果実の類を使ったりしますが、それでもさしつかえありません]。手紙をととのえ、使者を派遣します。使者は女氏（女性の実家）のようにします。女氏（女性の実家）は、手紙を受け取り、返事の手紙を渡し、使者にお礼します。使者は戻って、報告します。いずれも納采の作法と同じようにします。[礼は、納采のようにします。ただ廟に告げず、使者が言葉を出すとき、「采」を「幣」に改めます。従者は手紙と幣（贈り物）を前に出します。使者は手紙を主人に渡し、主人は答えて「吾子順先典、貺某重礼、某不敢辞、敢不承命」と言います。そこで手紙を受け取り、執事は幣（贈り物）を受け取ります。主人は二度おじぎし、使者はそれを避けます。戻ります。進んで命令を請います。主人は返事の手紙を渡します。その他は、いずれも同じです]。

第3章 親迎＝婿がみずから嫁の家に行き、嫁を迎える

結婚式の一日前、女氏（女性の実家）は、人を行かせて婿の室（部屋）に嫁入り道具を陳列させます。[世俗で言うところの「鋪房＝結婚式の前日に嫁の実家から人を行かせて、婿の小部屋を掃除させ、嫁入り道具を陳列させること」です。しかしながら、陳列するものは、ただフェルトのふとん、カーテン、小部屋を区切るための布といった実用的なもの、衣服が収納された鍵付の箱であり、必ずしも見せるために陳列する必要はありません。司馬公は、こう言っています。「文中子は、「妻を娶って財を論じるのは、野蛮人のやり方だ」と言っています。そもそも婚姻は、両家のよいところを合わせて、上はそうやって宗廟につかえ、下はそうやって後世につないでいくためのものです。今、世俗の欲が深くて心が卑しい人は、妻を娶ろうとして、まず資装（嫁入りの際に嫁がもってくる物品）が多いか少ないかを問います。娘を嫁がせようとして、まず

聘財（婿からの結納品）が多いか少ないかを問います。中には、契約を結んで、約束して「これこれの品物がいかほど、これこれの品物がいかほど」と言い、そうしてその娘の売り先を求めようとする人、また嫁いでから手のひらをかえすようにあざむいて約束を破る人がいますが、これはまさしく仲買人が下女を買い、召使いを売るやり方であって、どうしてこれを士大夫（紳士）の婚姻と言えるのでしょうか。その舅姑（夫の父母）は、あざむかれてしまったときには、その嫁をしいたげ、そうやってその怒りを発散させます。このため、その娘を愛する人は、がんばってその資装（嫁入りの際に嫁がもってくる物品）を多くして、その舅姑を喜ばせます。しかし、まったく現実がわかっていません。あの欲が深くて心が卑しい人は、満足を知らず、資装（嫁入りの際に嫁がもってくる物品）がなくなってしまったときには、どうしてあなたの娘を大事にしてくれるのでしょうか。ここにおいて、その娘を人質のようにして、女氏（女性の実家）に金銭を求めてきます。金銭が尽きれば、また求めてきて、終わりがありません。ですから、婚姻関係を結んだ家は、おうおうにして最後には互いに仇敵のようになってしまうのです。そういうわけで、世俗では男が生まれたときには喜び、女が生まれたときには心配するのです。中にはその娘を結婚させようとしらない人もいますが、それは以上のような理由からです。そうであれば、婚姻を話し合っていて、話が財物に及ぶ人は、すべて婚姻先としないほうがよいです。]

結婚式当日の朝、婿の家の室（部屋）の中に位置を用意します。[倚（イス）と卓子（机）の2セットを位置として用意し、東西で互いに向かい合わせます。蔬果（青物と果物）、盤盞（皿と杯）、匕筯（スプーンとハシ）は、賓客の礼のようにします。酒の壺は、東の位置の後方に置きます。さらに卓子（机）を使って、合盃（結婚式で新郎と新婦が使うペアの杯）1つをその南に置きます。さらに南北（男子）は2つの盥盆（桶や皿）と勺を室（部屋）の東の隅に用意します。さらに酒の壺、盞（杯）、注（水さし）を室外か別室に用意し、そうして従者に飲ませます。盃は、音が謹です。小さいヒョウタン1つを真っ二つに割ったものです。女性の家では、外に次（とばりを張ってつくった控所）を用意します。はじめての結婚では、婿はきれいに着飾ります。[世俗では、新郎は花勝（女性用ネックレスの飾り）を身につけ、そうして顔を覆い隠します。これは、りっぱな男子としての見た目をことさらに損なうものであり、使わないようにしてこそよいです。]。主人は祠堂に告げます。[納采の作法のようにします。祝版（祝詞をはりつける板）は前と同じです。ただし「某之子某若某親之子某、将以今日親迎於某官某郡某氏、不勝感愴、謹以」と言います。後は同じです。もし宗子（一族の代表）がみずから結婚するときには、みずから告げます。]。その子に酒をついで飲みほさせ終わって、迎えに行くように命じます。[ま

ず卓子（机）を使って、酒注（酒をつぐための水さし）、盤盞（皿と杯）を堂（表座敷）上に用意します。主人は、きれいに着飾って、堂の東序（東にある脇屋）に座り、西に向きます。婿の席をその西北に用意し、南に向きます。婿は西階より登り、席の西に立ち、南に向きます。賛（補佐役）は、盞（杯）を取って酒をくみ、これを持って、婿の席の前まで行きます。婿は二度おじぎして、席に登り、南に向いて、盞（杯）を受け取り、ひざまずいて酒を祭り（酒を地にそそぎ）、立ち上がり、席の末についてひざまずき、酒を飲み、立ち上がり、席を降り、賛（補佐役）に盞（杯）を渡し、さらに二度おじぎし、進んで父の座っている前まで行き、東に向いてひざまずきます。父は婿に命じて、「往嬰爾相、承我宗事、勉率以敬、若則有常」と言います。婿は「諾、唯恐不堪、不敢忘命」と言います。ひれふして立ち上がり、出ます。宗子（一族の代表）の子でないときには、宗子は祠堂に告げて、その父は私室において酒をついで飲みほさせます。作法のようにします。ただし「宗事」を「家事」に改めます。もし宗子（一族の代表）が父と死に別れていて、みずから結婚するときには、以上の礼法を使いません。婿は出て、馬に乗ります。[2人が灯火を持って先導します]。女性の家に着いたら、次（とぼりを張ってつくった控所）で待ちます。[婿は、大門の外で下馬し、次（とぼりを張ってつくった控所）に入って待ちます]。女性の家的主人は、祠堂に告げます。[納采の作法のようにします。祝版（祝詞をはりつける板）は前と同じです。ただし「某之第幾女、若某親某之第幾女、將以今日歸於某官某郡姓名、不勝感愴、謹以」と言います。後は同じです]。その娘に酒をついで飲みほさせ終わって、命じます。[娘は盛大に飾り、姆（おもり役）が手伝い、室外において南に向いて立ちます。父は東序（東にある脇屋）に座り、西に向きます。母は西序（西にある脇屋）に座り、東に向きます。娘の席を母の東北に用意し、南向きにします。賛（補佐役）は、飲みほさせるための酒をつぎます。婿の礼と同じようにします。姆（おもり役）は、娘を導いて母の左に出ます。父は起き上がり、命じて「敬之、戒之、夙夜無違爾舅姑之命」と言います。母は、送って西階の上に行き、娘のために冠をととのえ、帔（袖なしの羽織）を与え、命じて「勉之、敬之、夙夜無違爾閨門之礼」と言います。諸母姑嫂姉（父の姉妹たち、兄嫁たち、姉たち）は、送って中門の外まで行き、娘のために裙衫（着物）をととのえ、父母の命令を徹底させて、「謹聽爾父母之言、夙夜無愆」と言います。宗子（一族の代表）の娘ではないときには、宗子（一族の代表）が祠堂に告げて、その父は私室において酒をついで飲みほさせます]。主人は出迎え、婿は入って鴈をお供えします。[主人は婿を門の外に迎え、丁寧 hands を組み合わせて挨拶して入ります。婿は鴈を持ってついで行き、庭まで行きます。主人は阼階から登り、立って西に向きます。婿は西階から登り、北に向いて、ひざまずき、鴈を地面に置きます。主人の従者がこ

れを受け取ります。婿は、ひれふし、立ち上がり、二度おじぎします。主人はそれに答えるためにおじぎすることがないようにします。もし族人（一族の人間）の娘であるときには、その父は主人について行って出迎え、その右に立ち、父が主人よりも目上のときにはやや進み、目下のときにはやや退きます。およそ礼物は、新鮮な鴈を使います。左首は、生き生きとした色つやの絹を使って、まじわりまつわるように巻きます。ないときには、木を刻んで作り、その「陰陽に従って往来する」という義を取ります。程子は「その再婚しないことを取ります」と言っています。（訳注：鴈は、配偶者が死んだら再婚しない鳥と書かれています）。姆（おもり役）は、娘を丁重に案内して出て、車に登らせます。[姆（おもり役）は、娘を丁重に案内して出て、中門を出ます。婿は、手を組み合わせて挨拶し、西階から降ります。主人は降りません。婿が出て行き終わったら、娘はついていきます。婿は、轎（小さくて軽い乗用の車）の簾をあげ、そうして待ちます。姆（おもり役）は、辞して「未教、不足与為礼也」と言います。娘は、そこで車に登ります]。婿は馬に乗り、婦人の乗った車を先導します。[婦人の車も、2人が灯火を持って先導します]。その家に着いたら、婦人を導いて入ります。[婿は家に着いたら、庭に立ち、婦人が下車してくるのを待ち、婦人に手を組み合わせて挨拶し、導いて入ります]。婿と婦人は互いにおじぎしあいます。[婦人の従者は、婿の席を東側にしきます。婿の従者は、婦人の席を西側にしきます。婿は南において盥（たらい）で手を洗い、婦人の従者はこれに水をそそぎ、帨（手ぬぐい）を差し出します。婦人は北において盥（たらい）で手を洗い、婿の従者はこれに水をそそぎ、帨（手ぬぐい）を差し出します。婿は手を組み合わせて挨拶し、婦人は席につきます。婦人はおじぎしますが、婿はそれに答えるためにおじぎすることがないようにします]。座について飲食します。終わったら、婿は出ます。[婿は手を組み合わせて挨拶し、婦人は座につきます。婿は東で、婦人は西です。従者は酒をくみ、もてなしの料理を用意し、婿と婦人は酒をそなえて地の神を祭り、料理をささげます。さらに酒をくみ、婿は手を組み合わせて挨拶し、婦人は飲みほします。このときは酒をそなえませんが、料理をささげません。さらに盃（ペアになっている杯）を取って婿と婦人の前に置き、婿は手を組み合わせて挨拶し、婦人は飲みほします。このときは酒をそなえませんが、料理をささげません。婿は出て、他の室（部屋）まで行きます。姆（おもり役）は婦人と一緒にその室（部屋）の中にとどまります。もてなしの料理を片づけ、室外に置き、席を用意します。婿の従者は、婦人の料理の残りをもらって食べます。婦人の従者は、婿の料理の残りをもらって食べます]。また入って、服を脱ぎ、灯火をもった人は出ます。[婿が服を脱いだら、婦人の従者が受け取ります。婦人が服を脱いだら、婿の従者が受け取ります。司馬公は、こう言っています。「古い誌に「髪を結んで夫婦と

なる」と言っています。その意味は、少年が髪を束ねてからすぐに夫婦になることです。ちょうど李広が「髪を結んで匈奴と戦う」と言っているようなものです。今の世俗の婚姻は、もちろん「結髪（けつぱみ）の礼」がありますが、まちがっていて笑うべきものです。用いないようにしてこそ、よいです。主人は、お客にお礼します。[男の客は、外序（げじょ）（座敷の外）で接待します。女の客は、中堂（ちゅうだう）（座敷の中）で接待します]。

第4章 婦見舅姑＝婦人が舅姑に拝謁する

結婚式の翌日、朝早く起き、婦人は舅姑（きゆうこ）（夫の父母）に拝謁（はいえつ）します。[婦人は朝早く起き、きれいに着飾り、舅姑に会うのを待ち、堂（だう）（表座敷）上に座ります。お互い東西の方向に向かいあい、それぞれ卓子（しやくし）（机）を前に置きます。家人（かじん）（家族）の男女で舅姑よりも年少の人は、両序（りやうじょ）（東西の両方にある脇屋）に立ちます。このとき冠礼（くわんらい）の序列のように立ちます。婦人は、進んで阼階（せつがい）の下に立ち、北に向き、舅（きゆう）（夫の父）におじぎし、登って卓子（しやくし）（机）の上に礼物をそなえます。舅（きゆう）（夫の父）は、これを大切に扱います。従者は、そこで入ります。婦人は降り、もう一度おじぎします。終わったら、西階（せいがい）の下まで行き、北に向き、姑（こ）（夫の母）におじぎし、登って礼物をそなえます。姑（こ）（夫の母）は、手をそろえて持ち上げて、従者に渡します。婦人は降り、もう一度おじぎします。もし宗子（しゆんし）（一族の代表）の子ではなくて、宗子（しゆんし）（一族の代表）と同居しているときには、以上の礼を舅姑の私室で先に行います。宗子（しゆんし）（一族の代表）と同居していないときには、上記の作法のようにします。舅姑は、お礼します。[父母が娘に酒をついで飲みほさせる儀式のようにします]。婦人は、尊長（そんちやう）（目上の人）たちに拝謁（はいえつ）します。[婦人は、お礼を受け終わったら、西階から降ります。舅姑（きゆうこ）（夫の父母）より目上の人同居しているときには、舅姑（きゆうこ）（夫の父母）は婦人をその室（むろ）（部屋）に合わせるために行きます。これは舅姑に会うときの礼のようにします。戻り、両序（りやうじょ）にいる尊長（そんちやう）（目上の人）たちにおじぎします。これは冠礼（くわんらい）のようにします。礼物はありません。小郎（せうらう）（夫の弟）と小姑（せうこ）（夫の妹）については、その全員とお互いにおじぎします。宗子（しゆんし）（一族の代表）の子ではなくて、宗子（しゆんし）（一族の代表）と同居しているときには、お礼を受け終わったら、その堂（だう）（表座敷）上まで行って、おじぎします。それは舅姑に対する礼のようにします。かくして戻り、両序（りやうじょ）（東西の両方にある脇屋）に会いに行きます。その宗子（しゆんし）（一族の代表）と尊長（そんちやう）（目上の人）が同居していないときには、廟（びやう）に参拝（さんぱい）した後で行きます]。もし冢婦（つかぶ）（後継ぎとなる長男の妻）であるときには、舅姑（きゆうこ）（父の父母）に食べ物（たべもの）を贈呈（くわんせい）します。[この日の食事のとき、婦人の家は盛大な食事、酒の入った壺（つぼ）をととのえ、婦人の従者は堂（だう）（表座敷）上の舅姑（きゆうこ）（夫の父母）の前にある卓子（しやくし）（机）に蔬果（しゆくぶ）（青物と果物）を用意し、盃盤（さかずき）（たらい）

を阼階の東南に用意し、幌架（手ぬぐい掛け）は東に置きます。舅姑（夫の父母）は、座につきます。婦人は手を洗い、西階から登り、盞（杯）を洗って酒をくみ、舅（夫の父）の卓子（机）の上に置き、降ります。舅（夫の父）が飲み終わるのを待ち、さらにおじぎし、それから姑（夫の母）の前に進んで酒をすすめます。姑（夫の母）が受け取り、飲み終わったら、婦人は降り、おじぎします。それから料理を持って登り、舅姑（夫の父母）の前に丁寧に差し出し、姑（夫の母）のうしろに待機して立ちます。そうして食べ終わるのを待ち、食事を片づけます。従者は残った食べ物を片づけ、別室に分けて置きます。婦人は姑（夫の母）の料理の残りをもらって食べ、婦人の従者は舅（夫の父）の料理の残りをもらって食べ、婿の従者はさらに婦人の食べ残した料理をもらって食べます。宗子（一族の代表）の子ではないときには、私室において行い、ここでの作法のようにします。舅姑（夫の父母）は、相手の好意を受け取ります。[婦人にお礼する作法のようにします。お礼が終わったら、舅姑は先に西階から降り、婦人は阼階から降ります]。

第5章 廟見＝廟に参拝する

結婚式の三日後、主人は婦人とともに祠堂を参拝します。[昔は、三か月してから、廟に参拝しました。今は、その時間が離れていることから、改めて三日後に参拝するようにします。これは、子が冠をつけてから参拝する作法のようにします。ただし報告の言葉は「子某之婦某氏敢見」と言います。その他は、いずれも同じです]。

第6章 婿見婦之父母＝婿が婦人の父母に拝謁する

その翌日、婿は婦人の父母に拝謁に行きます。[婦人の父が出迎え、見送り、丁寧に手を組み合わせて挨拶します。それは客に対する礼のようにします。おじぎし、ひざまずき終わったら、助け起こします。入って婦人の母に拝謁します。婦人の母は、門の左の扉を閉じ、門の中に立ちます。婿は、門の外でおじぎします。いずれも礼物があります。婦人の父が宗子（一族の代表）でないなら、まず宗子（一族の代表）の夫婦に拝謁しますが、礼物を使わないで、上記の作法のようにし、その後で婦人の父母に挨拶します]。次の婦人の側の親族たちに拝謁します。[礼物を使いません。上記の作法のようにします]。婦人の家は、婿にお礼します。これは、ふだんの作法のようにします。[親迎（婿がみずから嫁の家に行き、嫁を迎える儀式）の夕方は、婦人の母と婦人の親族に拝謁すべきではありませんし、もてなしの酒食を用意すべきではありません。それは婦人が舅姑（父の父母）にまだ拝謁していないからです]。